

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：32698

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K10982

研究課題名(和文)施設の認知症高齢者に対する大学生のICTコミュニティシステムの構築

研究課題名(英文)ICT community system of university students for elderly people with dementia in facilities

研究代表者

塚本 都子 (tsukamoto, miyako)

東京純心大学・看護学部・教授

研究者番号：90639684

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：2023年、都内の全高齢者施設の看護・介護職を調査(回答599、9.36%)。老健では感染予防対策を徹底( $p<.05$ )、認知症ケア困難感が高い( $p<.05$ )。特養では認知症高齢者へのコミュニケーションスキル実施意識が高く( $p<.05$ )、負担感が低い( $p<.01$ )。2024年、グループホーム入所者へのweb対話型ボランティア活動(以下、活動)をした認知症サポーター大学生と職員に半構造的インタビュー実施。活動成果カテゴリ「活動による大学生の学び」「ボランティア活動メリット」、活動課題カテゴリ「入所者の抵抗感と要因」。本活動は大学生の自己成長を促進。入所者と職員、大学生が喜びを共感し信頼性が増す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、施設を利用する認知症高齢者に対してOnlineによる「傾聴ボランティア」を実施する認知症サポーター大学生とのコミュニティシステムを構築することである。コロナ禍の影響を受ける閉鎖的な高齢者施設内での認知症高齢者ケア困難感が明らかとなった。また、認知症サポーター大学生によるweb対話型ボランティア活動は、マスク着用せずに喜びを共感し会話を楽しむこと、施設職員との信頼性を高める結果が得られた。感染予防対策を強いられる施設内において、認知症高齢者の自分らしさの表現方法である会話能力を尊ぶ質の高い支援を提供でき、継続的な取り組みにより新オレンジプランに寄与できる。

研究成果の概要(英文)：2023, surveyed nursing and caregivers at all senior care facilities in Tokyo (599 responses, 9.36%). Nursing homes have thorough infection prevention measures ( $p<.05$ ) and high awareness of dementia care difficulties ( $p<.05$ ). Special care facilities have a higher awareness of implementing communication skills for the elderly with dementia ( $p<.05$ ) and a lower sense of burden ( $p<.01$ ).

Semi-structured interviews were conducted in 2024 with university students and staff members who were dementia supporters who conducted web-interactive volunteer activities with group home residents (hereafter referred to as "activities"). Activity outcome categories "Learning of university students from the activity" and "Benefits of volunteer activities"; activity issue category "Resistance of residents and factors". This activity promoted university students' personal growth. The residents, staff, and university students share the joy of the activity, and trust between them is increased.

研究分野：認知症高齢者ケア

キーワード：認知症サポーター大学生 ボランティア オンライン コミュニケーションシステム

## 1. 研究開始当初の背景

わが国は、総人口が減少に転じる中、2025年には認知症高齢者数は700万人(65歳以上人口5人に1人)と推計されている。国家施策として2015年、厚生労働省による認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)が策定された。目標は、認知症の人の意思が尊重され、出来る限り住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現をめざすことであり、次の7つの柱に重点をおき総合的な推進を急望している。1. 認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進、2. 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護などの提供、3. 若年性認知症施策の強化、4. 認知症の人の介護者への支援、5. 認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進、6. 認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデルなどの研究開発およびその成果の普及の推進、7. 認知症の人やその家族の視点の重視、の7つである。認知症高齢者の要介護認定の増大に伴い、高齢者施設利用者の7割が認知症をもち、介護職は多様な容態への対応が求められる。現状はマンパワー不足から、介護職の負担は著しい。

全国調査では、認知症重症度 以上の特養入所率75%、老健入所率52%を占め、業務負担感あり60%であった。30%の職員が暴言・暴力など認知症の症状BPSD(Behavioral and psychological symptoms of dementia)に悩んでおり、認知症ケア研修の希望が60%を占めている(日本看護協会,2016)。施設で働く介護職員の困難感は、「目が離せない」「見守りの必要性」「業務の緊迫化」(2006,谷口)といった業務負担の顕在化が指摘されているが、不動かつ無気力状態のまま生活を送る認知症高齢者も多く存在している。

研究者は長年、看護大学で学生の教育に携わるなか、施設実習で見た認知症介護は、誤嚥・転落・転倒・行方不明など事故防止対策が優先せざるを得ず、施設された閉鎖的環境のなかで食事・排泄・入浴・睡眠を一つのサイクルとした集団的介護がパターン化している。それまで塞ぎ込み、無表情、焦点の合わない視線、発語のない姿は、大学実習生が関わることで明らかに変化している。また、施設側の提供するリハビリテーションは、生活支援サービスの中で満足度が高く(坂本ら,2014)、ボールゲーム、童謡やクイズ、言葉遊びなど季節感を取り入れ工夫したレクリエーションを多彩に取り入れている。

2019年以降、COVID-19感染症の拡大に伴い、高齢者施設内の感染予防策として、家族の面会時間短縮や中止、施設職員のマスクや防護服等着用義務付け、介護支援時間の短縮化、レクリエーション縮小化、医療福祉系実習の受入れが中止となった。2020年5月27日、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が全面解除となったが、感染予防の観点から、施設で暮らす認知症高齢者の生活は、非日常的な制限が長期化している。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、施設を利用する認知症高齢者に対してOnlineによる「傾聴ボランティア」を実施する認知症サポーター大学生とのコミュニティシステムを構築することである。このボランティアを通じて以下の内容を明らかにする。

A - 高齢者施設の認知症高齢者とケアの現状を明らかにする。

B - 研究代表者、研究分担者および高齢者施設の看護介護職の協力の下、認知症サポーター大学生が施設に生活する認知症高齢者の「on line傾聴ボランティア」を実施を振り返り、活動の成果と評価、課題と方策を明らかにする。

C - 活動の拡大・継続サイクルのための高齢者施設との協議・学修の場のしくみを明らかにする。

## 3. 研究の方法

研究方法は、アクションリサーチ手法を用いる。本研究でこの手法は、研究者が認知症サポーター大学生とともに高齢者施設と関わり、施設介護スタッフや家族との協働のもと、現状理解につとめ、実践的課題に基づいた活動(on line傾聴ボランティア)を実践して、協議・学修の場でその成果を分析・課題と方策を見出すとともに実践に活かしていくという実践と研究サイクルを指す。このサイクルは、認知症高齢者ケアの専門的アドバイスによって機能するため高齢者施設の看護介護の実践家との共同連携にて展開する。

### (1) 【研究方法】

#### アクション前

Step 認知症サポーター大学生募集100名

Step 高齢者施設見学・研究協力依頼

Step 看護介護職への質問紙調査

- Step 認知症高齢者の家族への質問紙調査
- Step 研究者が傾聴ボランティアを実施
- Step 介入方法の分析・検証
- Step 認知症サポーター大学生の養成講座内容の検討、計画立案(対面・web 検討)

#### アクション実施

- Step 養成講座開講(認知症サポーター、傾聴)
- Step 認知症サポーター大学生の活動目標、活動計画に従い、高齢者施設に依頼
- Step 認知症サポーターonline ボランティア
- Step 認知症サポーター活動中・後の評価

#### アクション後

- Step 認知症サポーター大学生と施設職員「協議の場」で活動を振り返り、評価し課題を共有し、施設ケアに役立てる。
- Step 認知症サポーター・大学・施設で「学修の場」を開催し個別ケアを検証する

## 4. 研究成果

### 1) 高齢者施設の看護・介護職の認知症ケアに関する意識調査

COVID-19 禍における 2022 年 12 月から 2023 年 1 月 20 日、高齢者施設に勤務する看護職と介護職を対象に自記式質問紙調査を実施した。対象施設は、東京都すべての介護老人福祉施設(以下、特養)574 施設、介護老人保健施設(以下、老健)204 施設、介護医療院(以下、介護院)22 施設、計 800 施設である。1 施設あたり配付数は介護職者 5 名と看護師 3 名とし、計 6,400 部配付した。

回収結果、599 名から回答が得られた(回答率 9.36%)。施設間における比較分析の結果、老健では、感染予防対策を徹底し ( $p<0.05$ )、認知症症状への対応困難、コミュニケーション方法の理解不足など認知症ケア困難感が高かった ( $p<0.01$ )。また、仕事満足度が低く ( $p<0.01$ )、認知症ケア困難感との関係性が示唆された。特養では、認知症高齢者へのコミュニケーションスキル実施意識が高く ( $p<0.05$ ) かつ負担感は有意に低かった ( $p<0.01$ )。ケア代行支援者ニーズは、特養 69.9%、老健 79.6%、介護院 84.1%であった。職業別では、介護福祉士 77.9%、看護師 70.4%であった。認知症サポーター大学生による web ボランティアニーズに関しては、特養 53.1%、老健 48.1%、介護院 59.1%、職業別では、介護福祉士 50.2%、看護師 50.3%であった。

COVID-19 感染予防対策がつづく東京都の高齢者施設では、認知機能が低下した高齢者と向き合う代行者ニーズは 8 割前後と高く、認知症高齢者一人ひとりを尊ぶ良質な暮らしの実現に向けて支援を希望していることが示唆された。さらに、認知症サポーター大学生による web 対話ボランティアを導入するにあたり希望することの自由記述からは、「最後まで高齢者の話を聞く」「高齢者の話に共感する」ことを希望しており、認知症高齢者へのコミュニケーションスキル育成の重要性が示された。

### 2) 認知症サポーター大学生のグループホーム入所者への web 対話型ボランティア活動の成果と課題

2024 年 2 月、グループホーム入所者への web 対話型ボランティア活動(以下、活動)を実施した認知症サポーター看護大学生(以下、大学生)4 名と施設職員にグループインタビューを実施した。大学生は、2 年生 3 名、3 年生 1 名。入所者の特徴は、90 代女性 4 名、80 代女性 8 名、要介護 1~2。1 名あたりのボランティア活動時間は 15~27 分、平均 20 分。後日、活動開始時の心情、活動中に困ったこと、活動のメリットなどを半構造的インタビューで実施した。録音データから逐語録を作成し、内容を熟読し「活動の成果と課題」を表す記述内容を抽出しコード化した。内容が類似するコードを統合し、意味を適切に表現するサブカテゴリを生成した。次にサブカテゴリの類似性と相違性に留意して分類しカテゴリ化した。分析は、共同研究者 2 名で実施した。所属大学の研究倫理審査会の承認(承認番号 2022-5)を得たのち、活動前に、施設長、協力職員、大学生に研究の趣旨、研究協力と撤回に関する説明と同意を得て実施した。入所者とその家族へは、施設から紙面と口頭で説明し同意を得た。ボランティアを実施にあたり大学生は、ボランティア保険に加入した。

グループインタビューの総録音時間 59 分であった。活動の成果と課題は各 2 つのカテゴリが生成された。成果のカテゴリ「1. 活動による大学生の学び」では、2 つのサブカテゴリ 1) 認知症高齢者への理解が深まる、2) 活動には入所者を理解している施設職員の存在が有効、で構成された。カテゴリ「2. ボランティア活動のメリット」では、6 つのサブカテゴリ 1) 入所者は認知症高齢者を理解した大学生と関わりが持てる、2) 施設職員は入所者との安心感と信頼を再認識できる、3) 大学生は入所者のメッセージに心を打つ、4) 大学生は認知

症高齢者のイメージが変化する、5)大学生は、活動の価値を実感する、6)入所者・施設職員・学生とその瞬間に生きた体験を喜びあえる、で構成された。課題のカテゴリ「3. 活動中に困ったこと」では、3つのサブカテゴリ 1) 意思疎通がうまくいかない、2) タイムラグが生じ高齢者の話を遮る、3) 認知機能の低下に伴う言動への対応が分からない、で構成された。カテゴリ「4. 職員からみた入所者の抵抗感と要因」では、サブカテゴリ 1)新しい環境下での会話に適応しづらい、で構成された。

コロナ 5 類移行後も面会や外出制限が続くグループホームにおける on-line 活動は、安全が確保され、認知症高齢者への理解が深まるなど大学生の自己成長を促進している。認知症高齢者を理解した大学生が入所者と対話する本活動は、入所者と職員、大学生がともに喜びを共感でき、施設職員との信頼性を強める可能性が示唆された。オンラインに派生する課題、施設の通信環境への対策が求められることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 塚本都子	4. 巻 24
2. 論文標題 施設の認知症高齢者に対する大学生のICTコミュニケーションシステムの構築に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 52 - 54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚本都子	4. 巻 25
2. 論文標題 高齢者施設におけるICTコミュニケーションシステム構築に向けた基礎調査-COVID-19禍における高齢者施設の看護・介護職の認知症ケアに関する意識-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 塚本都子 大津山優葵 山本君子
2. 発表標題 認知症サポーター大学生のボランティア活動に対する不安の検討-階層的クラスター分析およびテキストマイニングを用いて-
3. 学会等名 日本看護研究学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大津山優葵 塚本都子 山本君子
2. 発表標題 認知症サポーター養成講座受講前後の大学生のエイジズムの実態
3. 学会等名 日本看護研究学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 塚本都子 山本 君子 平川 美和子
2. 発表標題 COVID-19感染対策下による介護老人保健施設の看護・介護職の認知症ケア困難感
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 塚本都子 山本 君子 平川 美和子
2. 発表標題 COVID-19感染対策下での高齢者施設の看護・介護職の認知症ケアに関する意識調査
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	山本 君子  (yamamoto kimiko)  (00622078)	東京純心大学・看護学部・教授   (32698)	
研究 分担者	平川 美和子  (hirakawa miwako)  (50775244)	弘前医療福祉大学・保健学部・教授   (31107)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------